

「  
コ  
コ  
ア  
」

鈴木すみれ

登場人物

黒崎灯	( 16 )	女子高校生。
春海雄介	( 31 )	売れないギタリスト。
鈴木優子	( 39 )	鈴木家の主婦。賢の妻。
鈴木賢	( 43 )	公平と浮気している。
鈴木香	( 16 )	夫。音と浮気している。
鈴木龍	( 9 )	高校生。鈴木家の長女。
大沢志穂	( 16 )	小学生。鈴木家の長男。
渋谷海斗	( 16 )	過去に秘密を抱えた高 校生。
佐藤公平	( 26 )	志穂の同級生。
篠原音	( 22 )	サラリーマン。
男子生徒 A		賢の会社の受付嬢。
男子生徒 B		

○渋谷駅・ハチ公前・ベンチ（夜）

ベンチに座り、ギターを弾きながら歌っている春海雄介（31）。

人々が通り過ぎていく。

演奏、止まる。

手元にあったココア缶を飲む雄介。

雄介に前から近づいている黒崎灯（16）。  
手にはコーヒーが入った缶を持っている。

灯「おじさん」

気がつかない雄介。

灯「おーじーさん」

雄介、顔を上げる。

雄介、僕のこと？と。

灯「おじさんしかないじゃん」

雄介「（ムツとして）おじさん、って」

灯「おじさんかお兄さんかっつたらおじさんでしょ」

雄介、なんなんだろう、とココアを飲む。

灯「おじさんって、DT?」

雄介「何？」

灯「童貞？」

雄介、むせて。

灯「あ、そうなんだ」

灯、雄介の隣に腰を下ろす。

雄介、反射的に避け、少し距離を開けて。

灯「何？」

雄介「いや、どなたですか？」

灯「普通の」ですが」

雄介「普通の」はこんな遅くにフラフラしてないと思いますけど」

灯「フラフラしてたわけじゃないよ。おじさんに話しかけたじゃん」

雄介「なんで？」

灯「下手だったから」

ギターを指差す灯。

雄介「……」

灯「怒った？」

雄介「別に。慣れてるから」

灯「ふーん」

雄介、灯を見て。

雄介「家帰らなくていいの？お家の人心配するよ」

灯「しないよ」

雄介「いやするでしょ普通」

灯「しないよ。普通じゃないし」

雄介、戸惑って。

灯「ギター弾けばいいじゃん」

雄介、不満ながらもギターを構える。

灯、空を見上げ、コーヒーを飲む。

ギターの音。

○鈴森家・外（明け方）

鈴森という表札のある家。

家の前に車が停まっている。

車の中、鈴森賢（43）が篠原音（22）と

キスをしている。

音「賢さん、帰らないで」

賢「明日会社で会えるよ。いや今日か」

賢、車から降りる。

音、降りてきて、賢の頬にキスをする。

賢「気をつけて」

音、車に乗り込む。

去っていく車。

賢、車を見送り、家の中に入っていく。

家の二階、窓から外の様子を見ていた鈴

森香（15）。

その下の階、リビングのカーテンの隙間から同じく外の様子を見ていた鈴森優子

（39）。

カーテンを閉める優子。

○同・リビング（朝）

賢、食卓につき、新聞を読んでいる。

台所でコーヒーを入れている優子。

二階から、制服姿の香が降りてくる。

優子「おはよう」

香「おはよう」

賢「おはよう」

香、一瞬無表情になり、すぐに笑顔を作る。

香「（賢に）おはよう」

洗面所に入る香。

二階から降りてくる鈴森龍（6）。

龍「おかーさん、ピアニカどこか知ってる？」

優子「今日音楽だっけ？」

賢「（龍に）おはよう」

龍「（賢に）おはよー！」

優子「（洗面所に）香ー！ご飯できたわよ」

香「今いく！」

×

×

×

賢、優子、香、龍、食卓について。

優子「いただきます」

賢・香・龍「いただきます」

ご飯を食べ始める4人。

無邪気に賢と話している龍。

そんな4人を無表情で見ている香。

○都内・高校・4年4組教室内

ホームルームの時間、騒がしい教室内。

教室の端の席で、大沢志穂（16）が、ぼ

んやり窓の外を見ながら座っている。

教室の真ん中あたりの席、渋谷海斗（16）  
がクラスを中心となって騒いでいる。

学級委員長の小林翼（16）、生徒たちの  
前に立っている。

翼「みんな！静かにして！文化祭の実行委員、  
やりたい人いませんか？推薦でもいいです  
けど」

そっぽを向いている生徒たち。

困っている翼。

そのとき、志穂がすつと手を挙げる。

志穂「わたし、やります」

翼「え？」

志穂「実行委員。わたしがやります」

志穂、席を立ち、黒板にチョークで自分  
の名前を書く。

志穂「（翼に）これでいいですよね？」

翼「あ、ありがとう」

席に戻る志穂、興味なさげに空を見てい  
て。



海斗、志穂をじつと見ている。

○歩道（夕）

歩いている志穂。

イヤホンで音楽を聴いている。手にはコアの缶と、化石に関する本。

後ろから追いかけてくる海斗。

志穂の何メートルか後ろを歩いている。

志穂、しばらく歩いて、後ろを振り向く。

志穂「……なに？」

海斗「いや、帰り道こっちだから」

志穂、また歩き出す。

海斗、志穂に続いて歩いて。

志穂、しばらく歩いてまた立ち止まり。

志穂「落ち着かないんで隣歩いてください」

海斗「あ、うん」

海斗、距離を開けつつ、志穂の隣を歩く。

海斗「聞いていい？」

志穂、めんどくさそうにイヤホンを耳から外して。

志穂「なんですか？」

海斗「3つ質問。1つ目。俺のことわかる？」

志穂「……2年3組。出席番号8番。渋谷海斗」

海斗「わかるんだ」

志穂「クラスメイトの顔と名前くらいは」

海斗「じゃあ3つ目。なんで敬語なの？」

志穂「ダメですか？」

海斗「いやダメってわけじゃないけど」

志穂「なら、はい」

海斗「はい、って？」

志穂「そういうことで」

海斗「不自然じゃん」

志穂「3つ目」

海斗「……なんで実行委員引き受けたの？」

志穂「ダメですか？」

海斗「いやダメじゃないけど、理由を聞きたくて」

志穂「早くホームルーム終わらせて帰りたいか  
つたからです」

海斗「それだけ？」

志穂「それだけです」

海斗「化石、好きなの？」

本を指差す海斗。

志穂「↑つ目の質問ですか？」

志穂、本を後ろ手に隠して。

海斗「……違うけど」

志穂「なら、答えなくていいですか。バス来たんで」

志穂、近くのバス停に止まったバスを指差す。

海斗「あ……はい」

志穂、バス停まで走って。

バスに乗り込む志穂。

一人取り残される海斗。

○鈴森家・リビング

優子、椅子に座り、家計簿を書いている。机の近くに置いてある固定電話のランプが光っているのに気づく。

優子、ある予感がしながら、再生ボタンを押す。

電話「留守電を一件再生します」。

漏れてくる音の声。

音『こんにちは。あ、今、賢さん隣で寝てます。あ、奥さんって、賢さんのほくろ知ってます？なんか賢さん、俺はほくろのない人間だとか言ってたんで、寝てる間に探してみたんですけど。そしたら、ありました、ほくろ。髪の毛の付け根のところに。髪の毛と同化してました（笑う）奥さん、気づきました？』

再生、終わる。

優子「……なんだっけ。あ、洗濯物」

×

×

×

玄関、チャイムの音。

キッチンにいた優子、玄関に向かう。

優子、玄関のドアを開けると、スーツ姿の佐藤公平（28）が立っている。

公平「（上気した顔で）優子さん！」

優子「入って」

家の中に入る公平。

優子、ドアを閉める。

公平、優子の手を掴み、いきなり口にキスをする。

優子「ちよつと…！」

玄関で倒れ込む人。

公平、優子に覆いかぶさる。

リビングで、湯気を立てて置いてあるコアの入ったカップ。

○メインタイトル「ココア」

○渋谷・ハチ公前・ベンチ（夜）

ギターを持ち、座っている雄介。

灯、現れて。

灯「よっ」

雄介「あ、また来た」

灯、雄介の隣に腰を下ろして。

灯「今日もギャラリーはゼロ。おじさん、い

つもこんなことしてるの？」

雄介「してるよ。二十歳の時からずっと」

灯「わー。お金は？」

雄介「……」

灯「ヒモ？」

雄介「こら。違うよ」

灯「実家暮らしか」

雄介「……」

灯「うわ凶星？」

雄介「ちよつと違う。仕送りしてもらってる

だけ」

灯「だけじゃないでしょ。もつとタチ悪いじ

ゃん」

雄介「はい」

灯「素直。おじさんって面白いよね。痛いと

こ突かれるとすぐ黙っちゃうの」

雄介「あんまり勘が良すぎるとモテないよ」

灯「財力のないおじさんは論外」

雄介「……もうこんな時間。家の人心配……

しないんだっけ」

灯「残念でしたー。いいよ。言われなくても消えますから」

灯、立ち上がり、スカートをはたく。

雄介「あ、待って」

灯「何？」

雄介「名前、なんていうの？君、じゃやりにくいし。次会ったとき呼べないでしょ」

灯「……秘密」

雄介「え？なんで」

灯「なんでも。じゃあね。（からかうように）お家の人心配するんで」

雄介「あ、ちよつと」

去って行く灯。

雄介「なんなんだよ」

ギターを構え、弾き始める雄介。

○高校・〇年〇組教室内（夕）

窓際の席、集まっている男子たち。

その輪の中にいる海斗。

離れた席で黙々と帰る支度をしている志

穂。

海斗、話しながら、横目に志穂の様子を  
気にしている。

教室を出て行く志穂。

海斗、不意に立ち上がる。

男子「え、海斗もう帰んの？」

海斗「ごめん、俺用思い出したわ」

○歩道（夕）

歩いている志穂。

その後ろから、志穂を追いかける海斗。

海斗「大沢さーん！」

志穂、イヤホンをしており気づかない。

海斗、志穂の肩を叩く。

志穂、振り向き、あなたか、と。

海斗「いや、その反応はないっしょ」

志穂「（イヤホンを外して）なんなんです

か？息切れてますよ」

海斗「走ったから」

志穂「いやわかりますけど」



海斗「大沢さんと帰ろうと思って」

志穂、無言でイヤホンをはめ直そうとする。  
る。

海斗「いや、待って待って、なんで」

志穂「ちよつと理解できなかったんで。渋谷くんがわたしと帰ろうとしている、っていう事実が」

海斗「……あ、なんでいつも化石の本持っているの？」

志穂「何目的ですか？」

海斗「何が？」

志穂「いや、なんで渋谷くんみたいな人が、わたしに近づくのかなって」

海斗「渋谷くんみたいな人、って。俺ってどんな人なわけ」

志穂「闊達で、ああいうグループとつるめる人じゃないですか」

海斗「闊達って？」

志穂「じゃ、わたしこっちなんで」

志穂、逃げるようにして去っていく。

海斗「あーまた逃した！」

志穂、海斗から見えなくなったところで立ち止まる。

志穂「（動揺）なんなのよ……」

○鈴森家・玄関（夕）

家に帰ってくる香。

香「ただいま……」

香、玄関の匂いを嗅いで、またか、と。

優子、リビングから顔を出して、笑顔で。

優子「お帰りなさい。寒かったですよ」

香「（笑顔で）うん。あ、昨日のアイス残ってる？」

優子「この寒いのにアイス食べるの？」

香「寒いから食べるの」

優子「お母さんにはできない所業だわ」

香、優子、笑って。

×

×

×

優子、キッチンで洗い物をしている。

ソファに座り、アイスを食べながら、横

目で優子を見ている香。

ついでにテレビ、ニュースで芸能人の  
浮気を報道している。

テレビのアナウンサー「報道によりますと、

俳優の藤森隆はこの騒動に対し：」

香、ニュースを見ながら、無表情で。

香「浮気とか」

優子の手からお皿が滑り落ちる。

皿が割れ、大きな音がする。

優子「あ、ごめん」

優子、シンクに散らばった皿のカケラを

拾おうとし、左手の薬指を切る。

優子「痛っ：」

香「大丈夫？」

香、キッチンに入って。

優子「大丈夫大丈夫。ちよっと手が滑った」

香「血でてんじゃん。絆創膏」

香、リビングに行き、救急箱から絆創膏

を取り出し、持ってきて。

香「指、出して」

香、優子の薬指に絆創膏を貼って。

優子「ありがとう」

香「うん」

テレビ「先日、藤森隆は都内の道路で接触事故を起こしており、軽い骨折をしたということですが」

香「（優子の指を見ながら）天罰じゃない」

優子、ビクツとして。

香「藤森隆」

優子「ああ…あ、そうね。うん」

香、立ち上がって。

香「（微笑って）じゃ、勉強する」

優子「（微笑って）うん」

香、リビングから出ていく。

残された優子、何かが込み上げて来て、手元にあったテレビのリモコンを手で払いのける。

優子、リモコンを拾うが、指が痛む。

優子「痛い…」

動きが止まる優子、うつむいて。

○渋谷・ハチ公前・ベンチ（夜）

雄介、ギターを弾きながら、周りを気にしている。

雄介、いないのか、と。

遠くからそんな雄介の様子を見ている灯。

灯、雄介に後ろから近づき、手で目隠しをする。

雄介「わっ」

灯「誰でしょうか」

雄介「……名無しのJK」

灯、雄介の隣に座って。

灯「正解。わたしのこと、待ってたっしょ」

雄介「いや別に……」

灯「おじさん、嘘つかないほうがいいよ」

雄介「お兄さん」

灯「〽日来なかつただけでもう寂しくなつたか」

雄介「学校帰り？」

灯「そんなとこ」

雄介「友達と帰らないの」

灯「……おじさんって、仕事できないって言われたい？」

雄介「え、なんで。今タブーだった？」

灯「そうやって返す感じ、出来なさそうだよ  
ね」

雄介「ひど」

灯、微笑う。

間。

灯「友達にさ」

雄介「ん？」

灯「友達」

雄介「あ、友達」

灯「灯、っていう子がいるんだけど。あ、同じクラスで。その子ね、入学したてのときは活発で積極的で、ほらあの、学級委員とか決めるときにははいはい手挙げる感じの」

雄介「あーいるね」

灯「で、なんかめっちゃお節介で、まあ言うてみればなんかうつつとうしい子だったわけ。

でもその子、二学期になって、家庭に問題あるのが学校にバレて。父親はDV、母親は水商売でネグレクト」

雄介「あーきつい」

灯「だけどその子、何もないみたいにならずとニコニコしてたわけ。でもクラスのみんなにその子、ハブられ始めて。だけどずっと、気持ち悪いくらいずっと笑ってて、学級委員とかやってて。三学期に親が離婚して、母親に引き取られたらしいんだけど。もうその頃にはクラスのみんな、誰も会話とかしなくなってる」

雄介「でも、友達なんだ」

灯「まあ一応？」

雄介「名無しさん、意外といいやつじゃん」

灯、ふっと笑う。

灯「その灯って子、前に自殺未遂して。なんか、部屋で手首切ったらしくて」

雄介「え」

灯「まあ、助かったんだけど」

雄介「なんだ。よかった」

灯「2週間前くらいにさ」

雄介「ん？」

灯「その子、授業中に窓から飛び降りて」

雄介「?!」

灯「まあ、一階だったから、全身打撲と骨折  
ですんだんだけど」

雄介「えーでも、そこまでいくとき」

灯「え？」

雄介「その子にも問題があるよね。リストカ  
ットしたり、窓から飛び降りたり。自分を  
見てっていうアピールなんじゃない？」

灯、ショックを受けて、しばらく雄介を  
見ている。

灯「(傷ついていて、それを隠すように)あ、  
そういうこと言うんだ」

雄介「ん？なに？」

灯、立ち上がって、スカートをはらう。

灯「(かすかに震える声で)……次こそは灯  
ちゃん、死ぬかもね」



雄介「え」

去っていく灯。

雄介、しばらく驚いているが、やがてギターを構えて弾き始める。

灯、雄介から姿の見えない駅の柱にもたれかかり、雄介の演奏を聴いている。

灯、洋服の袖をめくると、手首に傷がある。

灯、傷を手で覆って、……。

○鈴森家・香の部屋（夜）

部屋で勉強している香。

机の上に飾ってある、賢、優子、まだ小学生の香、小さい龍が並んだ家族写真が目に入る。

香、カッとなり、写真を手にとり、床に叩きつけようとする。

そのときノックの音がして。

優子の声「香？入ってもいい？」

香、驚いて写真を元の位置に戻す。

部屋に入ってくる優子。

ココアが入ったカップが乗ったお盆を持っている。

香、勉強をしてるフリをして。

優子、香の隣にココアを置く。

優子「お疲れさま」

香の頭に手を置く優子。

香、とつさに優子の手を払いのけた。

香「汚い手で触らないで！」

優子「(シヨック) ……」

香「(動揺) ……いや、なんでもない、ごめん、ごめんなさい」

優子「……どうしたの？最近、変」

香「ごめん」

優子「……じゃあ、がんばって」

戸惑いながらも部屋から出て行く優子。

香「(動揺) ……」

○歩道・日替わり(夕)

帰り道、歩いている志穂の後ろを海斗が

追いかけていて。

海斗「お、お、さ、わ、さん」

志穂、海斗の方を見ず、音楽を聴いている。

志穂の耳からイヤホンを外す海斗。

海斗「一緒に帰ろ」

志穂「嫌です」

海斗「即答」

志穂「どうしてわたしと帰るんですか。いっぱいお友達いるじゃないですか」

海斗「友達じゃないよあいつら。ただつるんでるだけ」

志穂「それを友達っていうと思うんですけど」

海斗「じゃあさ、大沢さんの中での友達の定義って何？」

志穂「え？」

海斗「俺は、大沢さんのこと友達だと思ってるけど」

志穂「……」

海斗「大沢さんは？」

志穂「……クラスメイト」

海斗「そこは友達でしょ！」

言い合いながらも一緒に帰って行く二人。

○同・日替わり（夕）

少し距離が近くなっている海斗と志穂。

海斗「だから、広辞苑で調べたって、闊達。

度量が大きくて、小さなことにこだわらな

いこと」

志穂「そのどこの褒め言葉なんですか？」

海斗「え、褒め言葉でしょ！」

○同・日替わり（夕）

同じように歩いている海斗と志穂。

さらに距離が近くなっている二人。

海斗「なんでいつもココア飲んでるの？」

志穂「好きなんで」

海斗「敬語やめない？敬われるような人間じ

やないしさ、俺」

志穂「別に敬ったつもりは。他人行儀なだけ

で」

海斗「それ普通、自分で言う?!」

志穂、笑いそうになり慌てて表情を戻す。

海斗、そんな志穂を見て。

海斗「大沢さんって、笑わないんだね」

志穂「え?」

海斗「笑わないでしょ。見たことないもん」

志穂「……(うつむく)」

海斗「あ、ごめん、なんか……」

志穂「いや。なんでもありません。……さよう

なら」

分かれ道を右に曲がろうとする志穂、途

中で立ち止まって。

志穂「(振り返らずに)笑わない、って決め

たので」

海斗「え?」

去って行く志穂。取り残される海斗。

○鈴森家・洗面所

優子、洗濯をしている。

ピーっという留守番電話の音。

優子、一瞬動きが止まって。

リビングに行き、電話機の前に立ち、留守番電話を確認する優子。

留守番電話、一件入っている。

一瞬ためらうが、ボタンを押す優子。

音の声『こんにちは。前から聞きたかったんですけど、賢さんってベッド入ると最初にどこにキスします？わたしにはいつも左の薬指からするんですよ。なんで？って聞いたら、君のここに指輪をはめることは一生できないから、って言われて。おかしくないですか？それで気になったんですよ。奥さんだどこにするのかなあって。やっぱり右の薬指ですかね（笑って）』

優子、しばらく硬直して、不意に受話器をとり、壁に投げつける。

無表情の優子、受話器を拾って。

そのままある番号をプッシュする。

優子「（受話器に）公平くん？わたし。来て

くれない？会いたいの」

○同・優子の部屋 ベッドの上

ベッドの中、優子に覆いかぶさっている

公平。

公平、優子の首筋にキスしようとして、

優子、止める。

優子「……して」

公平「ん？何？」

優子「左手の薬指にして。キス」

公平「え？」

優子「お願い……」

公平、優子の左手の薬指にキスをする。

されるがままの優子、目から涙が流れ、

頬を伝う。

○日替わり・高校・教室内（夕）

集まっている男子たち。

海斗、その中心にいて。

生徒たち、スマホの画面を見て。

男子A「ほら海斗、見ろよ」

海斗、スマホの画面を見て。

海斗「?!」

スマホをひったくる海斗。

スマホの画面、制服をボロボロにされて  
床に座り込んでいる女の子と、そこに立  
ちふさがる女の子の写真である。

男子B「この立ってるやついるじゃん? あい  
つらしいよ」

海斗「……大沢、さん」

男子A「え?」

海斗「大沢さんでしょ?! 大沢志穂」

男子B「そう。これいま出回ってんの、掲示  
板に。大沢って中学の頃いじめしてたらし  
いよ」

海斗、荷物を持って不意に立ち上がる。

海斗「ごめん俺、行かなくちゃ」

走って教室を出て行く海斗。

○大沢家・外観(夕)



海斗、インターホンを押す。

誰も出ない。

海斗、何度も押すが、反応がなく。

海斗「大沢さん！」

海斗、扉を叩いて。

○同・同（夜）

家の前、立って待っている海斗。

家の前を道を歩いてくる志穂。

海斗「大沢さん！大丈夫？！」

志穂「え……どうしているんですか」

海斗「今日学校休んだから、心配で」

志穂「普通に風邪です」

志穂、持っている薬屋さんの袋を示して。

海斗「風邪」

志穂「はい、風邪」

海斗「あ……あ、なんだ。そっかあ（安堵）

あ、じゃあうん、また明日学校で」

立ち去ろうとする海斗。

志穂、後ろ姿を見ていて。

志穂「掲示板のことですよね」

海斗、え？と振り向く。

志穂「掲示板。だから来てくれたんですよ」

海斗「あ、ああうん。でも、風邪なんでし

よ？」

志穂「風邪です。熱は下がりました。でも明

日は学校、行けないと思います」

海斗「……なんで？」

志穂「なんで。わからないです」

海斗「あの写真、合成？（言いづらく）あの、

女の子と、大沢さんが写ってるっていう

……」

志穂「合成じゃないんじゃないですか」

海斗「じゃないですかって」

志穂「いつ撮られたか覚えてないんで」

海斗「（驚いて）じゃあ、ほんとなの？」

志穂「（無表情）……」

海斗「否定も肯定もしないってことはそうだ

ってこと？」

志穂「（辛く）否定も肯定もしないってこと

じゃないですか」

海斗「大沢さん」

志穂「帰ってもらえますか？」

志穂、家に入ろうとして。

海斗「それは、大沢さんが笑わないことと関

係あるの？」

志穂、ドアノブに手をかけたまま止まっ  
て。

志穂「……そうかも、しれないです」

海斗、ショックで、……。

家に入って行く志穂。

取り残される海斗。

○鈴森家・リビング（夜）

食卓を囲み、夕食を食べている、賢、優  
子、香、龍。

優子、壁掛けのカレンダーを見て。

優子「あ、香。もうすぐ誕生日でしょ」

香、反応がなく。

優子「香？」

香「え？」

優子「誕生日」

香「あ、うん。うん、そうだね」

優子「なんか欲しいものとか」

賢「あんま高いものはダメだけどな（笑う）」

香「……欲しいもの、あるよ」

優子「ん？なに？」

香、料理に手を伸ばし、食べながら。

香「たくさんある」

優子「（微笑って）そうなの？」

香「（虚無的な表情で）スマホとコスメと漫

画と部屋のカーテンとハムスター」

優子「え？」

香「あと、猫も欲しい。カメラも、スマホケ

ースも欲しい」

優子「（驚いて）香？」

香「でも、全部、一番じゃない」

食べながら平然と話している香。

香「（思いが溢れて、でも淡々と）いら  
ない。今言ったの、全部いら  
ないよ。」

一番欲しいのはそれじゃないの」

香、優子と賢を見ないまま。

香「離婚してください」

優子、賢、！と。

香「離婚してください。お願いします。それ

が一番欲しいものです。もう疲れたから。

こう、こうやってこの、みんなでテーブル

囲んで、暖かい家庭みたいな。そういう、

そういうの、もう疲れたんで。こういうの

もういらないます。もうお腹いっぱいです。

離婚して欲しいんです。もうお互いに目を

逸らさないで欲しいんです」

優子、香の言っていることがわかり、

……。

香「息苦しい。苦しくて、死にそうになりま

す。でもまだ死にたくないです。死にたく

ないんで、離婚してください」

香、お茶碗を積み重ね、箸を上置いて。

香「ごちそうさまでした」

リビングを出て行く香。

残された賢、優子、龍、……。

○大沢家・外観（朝）

海斗、制服で立っている。

海斗「大沢さん！学校行こう？いるよね？」

反応がなく、海斗、無言で立ち去る。

○大沢家・前（夜）

海斗、志穂の家の前で。

海斗「あのさ！おととい、化石発見されたの知ってる？しかも、この辺の土手で！」

しかし反応がなく、海斗、立ち去ろうとして。

そのとき、玄関のドアが開き、志穂が出てくる。

志穂「近所迷惑」

海斗「……はい。ごめんなさい」

志穂「ストーカー」

海斗「ですよね」

志穂「バカじゃないの？」

海斗「バカです。はい。でも、大沢さんに学  
校来て欲しかったから」

志穂「化石って」

海斗「え？」

志穂「化石、見つかったってほんと？」

海斗「これ！」

海斗、コピーした新聞の記事を志穂に見  
せる。

記事に、希少な古生代の化石が発掘され  
たとある。

志穂、読んで。

海斗「あの」

志穂「これなら釣れると思ったわけ？」

海斗「あ、いや、ごめんなさ……」

志穂「正解」

海斗「え？」

志穂「わたし、あなたみたいに人のテリトリ  
ーに土足でズカズカ入ってくる人嫌いだけ  
ど」

海斗「……」

志穂「化石は好きだから」

海斗「……？」

志穂「明日、堀りに行くんで。じゃあ、おやすみ」

志穂、家に入って行く。

海斗「やった」

ガッツポーズをしながら、去って行く海斗。

○志穂の家の近くの土手（朝）

土手の下、小さな川が流れている。

土手で、スコップをそれぞれ持ち、土を掘っている志穂と海斗。

志穂「学校」

海斗「ん？」

志穂「今日学校でしょ」

海斗「（微笑って）いま気づいたか」

志穂「……行かなくていいわけ？」

海斗「（微笑う）」

志穂、無視して掘り始める。



間。

志穂「何も聞かないんですね」

海斗「ん？何が？」

志穂「わたしのこととか。……写真のこととか」

海斗「うわこれ、ここ固いね。手痛くなる」

志穂、騒いでいる海斗を見て。

志穂「わたし、友達いじめてたんです、中学のとき。そのいじめてた子が、化石が好きで」

海斗「……」

志穂「中学生のとき、わたしはクラスの人気者でした。勉強も運動もできたし、みんなに優しさ振りまいて媚び売ってたので」

海斗「自分で言うんだ」

志穂「でも、中二に上がったとき、転校生がクラスに入ってきて。その子、可愛くて頭良くてとにかく完璧で、みんなの人气がその子に流れはじめて。わたし、友達集めて、その子をいじめました。制服ハサミで切っ

たり、教科書隠したり、すごく陰険で卑劣なことをしました」

海斗「……うん」

志穂「でもそんなことしても全然楽しくなかった。ほんとに全然。焦ってばかりで、そんな自分を見ないようにしてて。で、あるとき、わたし、その子の写真を撮ったんです。そういう写真。よくある、ポルノ、みたいな」

海斗「……」

志穂「で、冗談のつもりで、一瞬だけ掲示板に載せたんです、それ」

海斗「え」

志穂「そしたら、笑っちゃうくらいすごいです。ピードで拡散されて。怖かったです。そこで自分のしたことの重さがわかって、怖くて怖くて、すごく怖くなって」

海斗「うん」

志穂「その子、北川くんっていう男子が好きだったらいいんですけど、北川くんがその

写真見ちゃって。そしたら北川くん、その子に（言葉に詰まって）」

海斗「……なに？」

志穂「言ったんです、汚いって。お前、汚れてるって」

海斗「（絶句）」

志穂「で、次の日、朝のホームルームで、先生から聞かされたんです。その子が自殺未遂したって」

海斗「え」

志穂「幸い命に別条はなくて。わたし、その日普通に授業受けて、普通に家に帰って。それで、帰ってから、一人で部屋で泣きました」

海斗「……」

志穂「わたしがいじめてた子、前はすごいよく笑う子で、でもわたし、もうこの何ヶ月、その子が笑ったの見たことないってことに気づいて。そんなの当たり前なのに、当たり前前なことが、すごくショックで。だから

決めたんです。もう笑わないって。その子が笑いたくても笑えなかった分。その日からわたし、一度も笑ってません」

海斗「……」

志穂「そういうこと、です。はい」

長い間。

海斗「俺の場合さ、逆。俺、中学のときいじめられてたんだよね」

志穂「え……？」

海斗「で、いま、全力で偽ってこんな感じ。

どう？俺、演じるのうまいでしょ？」

志穂「……完璧」

海斗「やったー（くったくなく笑って）。わかったんだ。なんとなく、大沢さんも、俺と同じかなって。だから声かけた。しつこく追い回した」

志穂「同じ。わたしとあなたが？」

海斗「うん。そうだよ。同じ（志穂の目を見て）。同じだよ」

志穂、思わず目をそらして、また掘り始

める。

海斗もまたスコップを手にして。

海斗「あのさ。あ、掘りながらでいいから。

あのさ、大沢さん、笑っていいと思うよ」

志穂「（掘りながら）え……なんですか」

海斗「なんですかじゃなくて。笑いなよ。笑

った方が可愛い」

志穂「可愛いとか（苦笑）」

海斗「（掘りながら）いますぐじゃなくてい

いから。ゆっくりでいいし、うん、そうだ

よ、ゆっくり、ゆっくりでいいから、笑っ

て？」

志穂の目から涙が溢れる。

土に志穂の涙が落ちて。

海斗「（思わず笑って）」

志穂「雨じゃないですか（鼻をすすって）」

海斗「（笑う）梅雨？」

志穂「季節外れの雨です」

×

×

×

掘り続けている人。

そのとき、志穂のスコップに何か硬いものが当たると。

志穂「あ」

海斗「何？」

志穂「なんか、当たった気がする」

海斗「え……化石」

志穂「まさか」

志穂、そういうながらも勢いよく掘り始める。

土の中から出てきた、化石のような形をしたもの。

志穂、それを土から取り出し、太陽にかざしてみても。

顔を見合わせる二人。

海斗、傍らに置いてあった新聞記事を見て。

記事にある化石の写真、志穂が持っているものとよく似ている。

海斗「一致！じゃない？」

○渋谷・ハチ公前・ベンチ（夜）

どこか上の空でギターを弾いている雄介。

○同・同（回想）（夜）

灯「（傷ついたように）あ、そういうこと言うんだ」

ギターを弾く手を止める雄介。

隣に置いてあったココアの缶を持ち上げ

ようとし、後ろの茂みに何かを見つけて。

雄介、ん？と思い、茂みの中からそれを拾って。

よく見ると、それは、灯の生徒手帳だ。

雄介「……え？」

灯の写真の横に、黒崎灯、と名前が書いてあって。

混乱する雄介。

×

×

×

回想、フラッシュバック。

灯「わたしの友達に、灯って子がいるんだけど。父親はDV、母親は水商売でネグレク

ト」

灯「その子、なんか部屋で手首切ったらしく  
て」

灯「教室の窓から飛び降りた」

灯「……次こそは灯ちゃん、死ぬかもね」

回想、以上。

×

×

×

雄介、呆然と生徒手帳を見ていて。

そのとき、何かに気づく雄介。

雄介、いきなり立ち上がる。

ココアの缶が転がる。

雄介、ギターを持って走り出す。

○同・裏通り（夜）

ギターを持ち、必死で走っている雄介。

○同・ラブホテル街（夜）

雄介、ラブホテル街を走って通り過ぎよ

うとし、不意に足を止める。

灯がいた。



雄介、ラブホテル街の方へ足を進めて。  
あるホテルに、中年男性に手を引かれて  
入ろうとしている灯の姿が見える。

雄介、呆然と灯を見ていて。

灯、男に手を引かれ、ホテルに入ろうと  
する瞬間、顔に嫌悪の表情がよぎる。

雄介、その表情を見て、何かを決心して。  
道の真ん中でギターを構える雄介。

雄介、Happy Birthday を弾き始める。

大きな声で歌う雄介。

眉をひそめて雄介を見る、道ゆく人々。

雄介 「Happy Birthday to you Happy Birthday」

人の視線に構わず歌っている雄介。

灯、その歌声に気づいて、ホテルの前で  
ふっと足を止める。

灯、雄介の歌を聴いていて。

心の中、葛藤している灯。

灯、いきなり、男の手を振り切り走り出  
した。

灯、雄介のもとへと歩道を走っていく。

雄介、ギターを構えて歌っていて。

雄介 「Happy Birthday dear……」

灯、雄介の前に立つ。

雄介、手を止めて。

対峙する二人。

灯 「……」

雄介 「……」

灯 「……はい」

雄介 「……はい」

無言の二人。

後ろから追ってきていた男。

男 「ちよつと！……ねえ！」

灯、怯えて。

雄介、そんな灯を見て。

雄介 「……走るけど」

灯、頷く。

雄介、灯の手を取り、走り出した。

必死で走る二人。

○渋谷・公園（夜）

息を切らし、立っている二人。

雄介「……あいつ、ちゃんとまいたかな」

灯「体力ないと思うから大丈夫」

雄介「そっか」

間。

雄介「これ。落としてた」

雄介、灯の生徒手帳を出して、灯に差し出す。

灯「（受け取らずに、見て）なんで」

雄介「（手を下ろして）ん？」

灯「……なんで来たの？」

雄介「なんで。なんでだろ。わかんないや」

灯「わかんないって」

雄介「（微笑って）この歳まで生きてても人  
生わかんないことばっかだよ」

灯「……ありえないでしょ。こういうの」

雄介「こういうのって？」

灯「道端で、歌うとか。しかもハッピーバー

スデー」

雄介「だって、誕生日だよね？ 今日」

○同・ハチ公前・ベンチ（夜）（回想）

灯の生徒手帳を見ている雄介。

生年月日の欄、今日の日付で。

灯「まあ」

雄介「まあって」

間。

雄介「じゃあ。もう遅いし。帰った方が」

灯「……はい」

雄介「あ、これ。忘れてた」

雄介、灯に生徒手帳を差し出して。

灯、それを見つめていて。

雄介「（生徒手帳を灯に近づけ）はい」

灯「……うん」

雄介「灯ちゃん」

灯、自分の名前を聞き、硬直して。

灯の目から涙が溢れる。

雄介「（慌てて）え？え、あ、ごめん……」

灯、首を振って、涙を乱暴に手でこする。

灯「灯じゃないよ」

雄介「え？」

灯「灯じゃないよ、わたし。灯じゃない」

灯、雄介の手から生徒手帳を受け取って。

灯「（きつぱりと）灯じゃないよ」

雄介「（なんとなく察して）……うん」

灯「でも、灯ちゃんは元気だよ。死なないよ」

雄介「うん。そっか。そっか、うん」

灯「（力強く）死なないよ、絶対」

見合う心人。

灯、踵を返して、去ろうとする。

雄介「（思いが溢れて）また！」

灯、振り向いて。

雄介「また、会えるかな」

灯「（少し微笑って、首を振る）もう会えな

いよ」

雄介「え？」

灯「もう会えないよ。もう会わない」

雄介、そっか、と。

灯「プレゼント」

灯、カバンから何かを二つ取り出し、雄介に投げる。

雄介、慌てて受け取って。

雄介、両手の中を見ると、ココアとコーヒーの缶である。

雄介、え？と思って顔を上げると。

もう灯はいなかった。

雄介、立ちつくしていて。

雄介、手の中のコーヒーとココアの缶を見て、何かが目み上げてきて。

雄介、近くにあったゴミ箱の上で、二つの缶をそれぞれ手に持ち、空中に掲げる。

雄介、やがてココアの缶を持っている手をパツと離して。

ゴミ箱の中に落ちるココアの缶。

雄介、コーヒーの缶を持ち、何かを決意した表情で、立ち去る。

○鈴森家・香の部屋・中（夜）

香、思いつめた表情でベッドの上に横た

わっている。

そのとき、ドアがノックされる。

香、体を起こして、緊張。

優子の声「香。起きてる？」

香、……。

以下、カットバック。

× × ×

優子、香のドアにもたれ、座り込んで。

優子「香。寝ちやった？……そっか」

× × ×

香、ベッドの上に腰掛け、うつむいていて。

優子の声「あのね、香。わたし、女の人なんだ。でもね、香と龍の前では、お母さん。

賢さんの前では、奥さん」

香、……。

優子の声「賢さんね、浮気してるの」

× × ×

優子「あのね、お母さんも浮気してるの」

× × ×

香、ベッドから降り、ゆっくりドアへ歩いて。

× × ×

優子「でも、わたし、浮気相手のこと全然好きじゃないの。好きじゃないのよ。それでね、びっくりするくらい賢さんが好きなの」

× × ×

ドアの少し手前で体育座りをする香。

優子の声「浮気してるとね、一人の女の人になるの。そうするとね、気が楽になる気がして。でも、気がただけ。心に溜まってる、そういうものは全然軽くならなくて、わたし、自分自身で、家での居場所をどんどん壊してってた」

香の目から涙が流れる。

× × ×

優子「わたし、女の人になりすぎちゃった。

お母さん、サボりすぎちゃったの」

優子、うつむいて、涙が溢れて。

優子「（泣きながら）ごめんね、香」



×

優子の声「わたしね、お母さんでありたいの」

×

×

香、え？と。

優子の声「傲慢で欲張りなことはわかってるの。でも、わたしは、賢さんの奥さんで、香と龍のお母さんで、それ以外の何者でもないの。何者にもなれないの」

×

×

×

優子の声「（震えて）許してもらおうとは思ってない。ただ、この家族でいたいのに。」

鈴森優子として生きたいの……」

×

×

×

香、ドアに右手で触れて。

優子の思いを感じていて。

×

×

×

立ち上がる優子。

香の部屋のドアを見て。

優子「おやすみなさい」

立ち去る優子。

ドアの前に座り込んでいる香。

○日替わり・志穂の家の近くの土手

志穂の手の中的のものと、新聞の化石の写真を見比べている海斗と志穂。

海斗「これ、これさ、ねえ、どっかに報告とかしないと」

志穂「興奮しすぎ。ちよつと黙ってて」

海斗「大沢さん、手震えてるよ」

志穂、あ、と思つて、手を抑えて。

志穂「別に」

海斗「（微笑つて）好きなんだね、化石」

志穂「……そうかも」

海斗「え？」

志穂「そうかもしれない。わたし、あの子への罪滅ぼしのために好きになったと思つたけど、いつのまにか夢中になつたのかも」

海斗「大沢さん」

志穂「それで、それでね、想像するんだ。転校してきたばかりのあの子に、わたしも化石が好きだよって話しかけるの。二人で

化石の話ししながら帰るの。帰り道、二人で笑って、オディラプトルっていう恐竜の化石の話しするの。したかったの。できたのかな。あの頃、できたのかな、わたし、もつと素直だったら、もつと……（涙を堪えて）

海斗「大沢さん……（と、話そうとするが）」

志穂、驚いた表情で手の中のものを見ていて。

海斗「大沢さん？」

志穂、不意に吹き出す。

海斗「？」

志穂「（笑っていて）」

海斗「ねえ、なに？どうしたの？」

志穂「残念でした」

海斗「え？」

志穂「これ、化石じゃないよ」

海斗「え？だって……」

志穂「化石じゃないよ。ただの石」

志穂、手の中ものと新聞記事の化石の写

真を比べて。

志穂「ここも、あとここの色も違うし」

似ているが、微妙に違う二つ。

海斗「ほんとだ……」

志穂「（笑って）あー早とちり。バカみたい。  
ほんとバカ」

志穂、手の中の石を見て。何かこみ上げ  
る思いがあつて。

志穂、手に持っている石を川へ投げる。

海斗「あ！」

石、大きく弧を描いて、川に落ちる。

水の音。

志穂「バイバイ！」

志穂、川に向かって大きく手を振って。

海斗、驚いて、志穂の横顔を見る。

志穂「バイバイ！バイバイ！」

志穂、だんだん泣き顔になって。

志穂「……バイバイ！バイバイ……」

志穂、手を下ろして。

海斗、無言で、志穂の手を握る。

志穂、驚くが、握り返して。

手を繋ぎ、川を見ている人。

○都内・クリスマスツリーのある場（夜）

そびえ立つクリスマスツリー、人々が周りを取り囲んでいる。

賢、龍を抱っこし、クリスマスツリーを見ている。

近くのベンチに座っている香、龍と賢を見ている。

香の前にココアの缶が差し出される。

優子、ココアの缶を心持って、香の前に立っていて。

香「（缶を受け取って）ありがとう」

優子、香の隣に座って。

微妙に距離を開けて座っている人。

賢、龍を抱っこし、高い高いをしている。

香「（ココアを飲んで）あー危ない危ない」

優子、そんな香の横顔を見る。

優子「（賢と龍を見て）ありがとう」

香「（賢と龍を見ながら）ん？」

優子「ごめんなさい。ありがとう」

香「（優子を見ず）……許したわけじゃないよ」

優子「え？」

香「許したわけじゃないよ。賭けてみようと思っただけ。いいよね？それでもいいよね？」

優子、無言で手を伸ばし、香の頭を撫でる。

優子「（涙ぐんで）ありがとう」

香、ココアを飲んで。

優子「あのね、お父さん、フラれたんだって。

浮気相手の女の人に」

香「（優子を見て）……へえ」

香、優子から視線を外して。

香「（笑って）ダサっ」

優子「え」

香「お父さん。フラれるとか、超ダサいじゃん」

優子「……お母さんもね、フラれた」

香「（プツと吹き出して）夫婦揃って惨敗？」

優子「そうね（笑い出す）」

笑っている香と優子。

○同・同（夜）

クリスマスツリーを眺めている、制服姿の志穂。

後ろから肩を叩かれる。

振り向くと、指で頬をムニッと押されて。

志穂「なんですか」

後ろに、クレープを片手に持つ海斗がいた。

海斗「引っかかったー」

志穂「うざいんでやめてください」

海斗「はい。ごめんなさい」

海斗、志穂の隣に立って。

志穂、少し距離を開ける。

海斗、その距離を詰めて。

志穂、また距離を開けて。

海斗、その距離を詰めて。

志穂「なんですか」

海斗「(クレープを志穂に差し出して) はい」

志穂「(クレープを見て) いらないます」

海斗、無理やり志穂の手を取って、クレープを一つ握らせる。

海斗「食べて」

志穂「いや、だから」

海斗「(志穂の目を見て) 食べて」

志穂、思わず目をそらして。

仕方なく食べる志穂。

海斗「やったー」

海斗、微笑って、クレープを食べる。

志穂、仕方なくクレープを食べる。

海斗「あ、確認なんだけど」

志穂「はい」

海斗「大沢さんって俺のこと好き？」

志穂「……いいえ」

海斗「えー……」

海斗、ショックで。

志穂、そんな海斗を見て、思わず微笑って、しかし慌てて表情を戻して。



海斗、そんな志穂を見る。

海斗「じゃあ決めた。俺たち付き合うことにしよう」

志穂「え、なんですか？」

海斗「強行採決」

志穂、反論しようとする、海斗、志穂の腕を引っ張り、いきなり口にキスをする。

志穂「え……」

海斗、すぐに顔を離して、志穂から少し離れる。

志穂、海斗との距離を詰めて。

志穂「なんですか？」

海斗、志穂から離れて。

海斗「なんでもないです」

志穂「え」

志穂、海斗との距離を詰めて。

海斗「あー忘れて！忘れてください！」

○同・同（夜）

スーツ姿の雄介、クリスマスツリーの前で足を止める。

少し距離を開けて、誰かが隣に立つ。

雄介、横を見ると、制服姿の灯だった。

灯、雄介に気づいて。

心人、目が合い、すぐに目をそらす。

間。

雄介、鞆から携帯電話を取り出して。

雄介、携帯電話を耳に当てる。

携帯電話の画面、真っ暗だが、話し始める雄介。

雄介「あのさ。俺、就活始めたよ。スーツとか似合わないでしょ。二年ぶりくらいだよ、着たの（微笑って）」

灯、クリスマスツリーを見ながら聞く。

雄介「ギターやめた。夢にすがりつくのはやめたよ。君のおかげ。ありがとう……」

あと、ココアは卒業。コーヒーにしたよ。

苦いけど、苦いから、飲んでる」

雄介、携帯電話を耳から離して。

すると灯、雄介に近づき、雄介の手から携帯電話をひったくる。

雄介、……。

携帯電話を耳に当て、話し始める灯。

灯「灯ちゃん、いじめ終わったらしいよ」

クリスマスツリーを見上げる雄介。

灯「……あとね、わたし、コーヒー飲むのや

めたよ。いまはココアにしたけど。甘い

ね、あれって。甘すぎだよ。あと、わ

たし……（携帯電話を耳から離して）

携帯電話を雄介の手に押し付ける灯。

灯、また雄介と距離を開け、クリスマス

ツリーを見て。

無言でツリーを見上げている心人。

心人、お互いの顔を見ないまま。

灯、踵を返して立ち去る。

鞆からコーヒーの缶を取り出す雄介。

雄介、コーヒーを飲んで。

雄介「……苦っ」

〈了〉